

文化遺産保護の新潮流：有形・無形文化の包括的保護によるコミュニティの Well Being 創造

岡部政美

大阪公立大学大学院文学研究科 人文学学際研究センター研究員

本稿の目的は現在、国際機関が提唱している新しい文化遺産保護アプローチである有形・無形文化遺産の包括的保護が、コミュニティの Well being 実現のための重要な要素として注目されるようになった経緯を整理し、そこに 2023 年に世界遺産リストに記載されたインドネシアの「ジョクジャカルタの宇宙軸と歴史的建造物群」ⁱ(以後、「宇宙軸」)を位置づけて考察することにある。

1. 文化遺産の単体保護から包括的保護へ

世界遺産条約は 1972 年に採択された当初、歴史的建築物やモニュメントなどの有形遺産を単体で「損傷、破壊等の脅威から保護・保存」(条約前文)することを目的としていた。しかし次第に自然環境とそこでの人間の営みは不可分であること、地域文化を維持しているのは人々の無形の営みであるという考えが広まったことを受け 1992 年に世界遺産に「文化的景観」というカテゴリーが導入され、2003 年には無形文化遺産保護条約が採択された。このように世界遺産の概念の拡大から無形文化保護の重要性が認識されるに至ったが、その後、2つの条約は独立したものとして運用されてきた。

ところが 2022 年からは相次いで有形・無形の2つの文化遺産を、包括的に保護する考えが示されるようになった。まずユネスコが 2022 年の「モンディアカル宣言 2022」で、文化は人々の Well being の基盤であり有形・無形の文化遺産を総体として捉えて、持続可能な開発の原動力に位置づけること、2023 年の「ナポリ精神」で、2つの文化遺産保護の中心に地元コミュニティの参加を据えることを謳った。2024 年には国連が未来サミットで人類の真の豊かさは GDP ではなく Well being 実現にあり、文化はそのための重要な要素であるため 2030 年に改訂予定の新 SDGs に文化を独立した目標として組み込む意向を明らかにした。さらにユネスコは 2025 年に「都市の文脈における無形文化遺産保護」ⁱⁱをまとめ、世界遺産リストへの記載に必要な遺産の「真正性」と「顕著で普遍的な価値」(Outstanding Universal Value、以後 OUV)の証明には、都市部の遺産の場合、無形文化遺産との関係を考慮すべきとの考えを示した。そして「モンディアカル宣言 2025」では、これまでの流れを総括して、地元コミュニティが中心となって有形・無形の文化遺産を包括的に保護すること、それにより人々の Well being が向上すること、そのために文化を新 SDGs の 4 番目の目標に据えることを改めて謳った。

2. Well being 実現を支える無形文化遺産保護条約の理念

前項で見た最新の文化遺産保護のアプローチは、より無形文化遺産保護条約の理念に近いと言える。その背景には 2024 年の未来サミットで議論されたように経済中心の豊かさの限界を迎えた現在、人類の真の幸福は Well being であるとの認識が高まったこと、つまりモノから精神的豊かさを求めるという考え方のシフトがある。この点で人間の精神的営みを保護する無形文化遺産条約の理念は合致していたのである。

無形文化遺産条約では文化の担い手コミュニティを最大限に尊重し、文化を世代から世代へと伝承され、絶えず再現されるプロセスと捉え変化を肯定する(2 条 1 項)。本条約の最大の目的は条約名に safeguarding を使用しているように「セーフガード」、つまり変化を不可避とする無形文化の動的状態の存

続を確保することにある。言い換えればコミュニティが主体的に文化活動を営むことを可能とする環境の維持を積極的にサポートすることを目的としている。「モンディアカル宣言 2022」では文化が人々のアイデンティティ、帰属感、尊厳、社会的連帯、生きる意味の中核となると述べているが現在、国際機関は無形文化の営みはコミュニティが主体であり、必然的に文化が担い手の心情と結びつく点で、人々の Well being 実現に不可欠と考えているのである。

3. ジョクジャカルタの「宇宙軸」の独自性

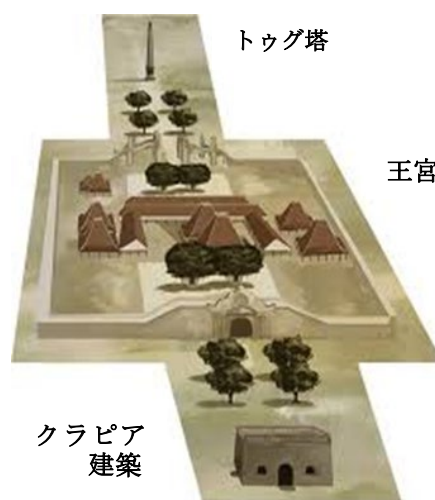
3.1 2つの文化遺産条約の理念の相違

実は有形・無形文化遺産の包括的保護は、すでに 2004 年にユネスコが「大和宣言」で提唱していたが長く進展が見られなかった。その要因は世界遺産条約と無形文化遺産条約の文化保護の理念の相違にあったと考えられる。世界遺産リストに記載されるためには遺産の OUV と真正性の証明が必要となる。OUV とは国境や時代を超えて、誰が見ても重要で素晴らしい価値を意味する。真正性はユネスコの遺産保護に対する姿勢を示しており、世界遺産条約では条約名に protection を使用しているように遺産を、できるだけオリジナルの形態を保って保護することを目的とする。ここでの真正性とは遺産の本質的価値が保たれているか否かであり、微細な変化はあったとしても伝統的な建築材料や工法が保持されているかや、遺産の建設時の宗教・精神的価値や空間的コンセプトが保たれているかどうか厳しく問われる。

これに対し上記のように無形文化遺産条約は、文化の変化を本質的で不可避であると認めコミュニティの意思を絶対とする。よって世界遺産条約は外部の専門家からの評価や真正性を重視するのに対し、無形文化遺産条約は内部の担い手コミュニティの現在進行形の文化実践を尊重するという理念の相違が認められる。

3.2 「宇宙軸」における有形・無形文化の関係

この2つの条約の理念をうまく組み合わせ、現在の文化遺産保護の方向性を顕著に有する事例がジョクジャカルタの「宇宙軸」と言える。本遺産はジャワ哲学 (Filosofi Jawa) に基づいて 1755 年にジャワ島中部のジョクジャカルタに王宮を置いた初代王が、まちづくりのコンセプトとして定めた王宮を中心とした想像上の 6 キロの直線軸である。ジャワ哲学は諸宗教を融合し、宇宙の摂理の中に人間界を位置づける深遠な思想体系であり、今も細部までジャワ人の行動様式を律している。中心となる資産(世界遺産を構成する構成要素)は南のクラピア建築、中央の王宮、北のトゥグ塔であり、この 3 つを結ぶ軸で大宇宙と小宇宙(人間界)の関係や王であるスルタンの役割、人間の一生とそこで求められる役割や欲望などを幾重にも細かく表現している。



ユネスコに提出された推薦書によれば本遺産の真正性は、建築物の形状やデザイン、素材、用途などとともに、信仰・価値体系といった無形文化の要素を十分に保っていることによって保障されている。OUV は 10 項目のうち基準 ii 「価値の交流」と、基準 iii 「独自性・希少性とその証拠」が認められている。基準 ii は「宇宙軸」がジャワの重層的信仰と価値の体系が、空間構成、建築物、儀礼などの無形要素によって具現化されていること、基準 iii は現在もジャワ哲学の宇宙観、人生観とそれを具現化する儀礼が行われていること、王国建設当初からの統治体制が維持されている点で当地がジャワ文明の中心地であり続けていることを評価している。このように推薦書から「宇宙軸」は無形文化の存在が十分に認められて、リスト記

載に至ったことが読み取れる。

4. 「宇宙軸」と文化的 Well being の関係

4.1 「宇宙軸」の整備状況

次に「宇宙軸」における文化的 Well being 実現について、2025 年に表明されたばかりのユネスコの考えに従って分析する。以下に記す現地の状況は王宮公式 Web サイト、関連の諸機関とその指導者の SNS から得ている。まず「都市の文脈における無形文化遺産保護」には、無形文化を都市計画の重要な要素と位置付けることで、無形文化を通したコミュニティの交流が促進され人々の幸福を実現させる、そのため都市空間の保護が必要(c-10)と記載されている。

地方の文化都市であるジョクジャカルタは人口集中、観光といった都市特有の課題を抱えている。このうち推薦書と共にユネスコに提出された「宇宙軸」のマネジメントプランでは、軸の中心部である王宮城壁の不法住民と、軸北部の高層ホテルの乱立の 2 点を早急に解決すべき課題として挙げていた。これらはジャワ哲学を視覚化する 6 キロの軸の景観や哲学上の意義、軸の神聖性を妨げていることがその理由だった。この問題は現在、政府による法整備を含む建築規制が進み、不法住民の転居も正当な補償を伴ってほぼ完了し、「宇宙軸」を中心とした都市空間のコンセプトはクリアに視覚化された状態にある。

次に「モンディアカル宣言 2025」では文化活動への参加は住人の権利であり(第 1 項)、文化機関を機能させることが必要(第 2 項)、デジタル技術を活用して人々が文化に公平にアクセスできる環境を整え(第 7 項)、研究促進やデータ公開を求める(第 9 項)とある。

当地の特殊な行政機構として現存の王宮が文化機関として中心的な役割を果たし、地方政府がその行政上の補助を行うという構造がある。これには現王であるスルタン 10 世が、王と州知事を兼任し、さらにジャワ哲学では王がこの世に安寧をもたらす存在と位置付けられているという事情がある。王宮では 1755 年の創設当時から続く伝統的な統治体制が現在まで機能し続けており、社会の変化に応じて再編も続いている。近年でデジタル技術を用いて王宮の文化発信を行う部門として 2012 年に新設されたトンド・エクティ(Thanda Yekti)の活躍が目覚ましく、2016 年より王宮の公式 Web サイト、Youtube, Instagram, Facebook の運用を開始し、頻繁に情報発信を続けている。これにより王宮は従来、人々が王宮に対して持っていた古風で神秘的で畏れ多いというイメージを、オープンで親しみを感じさせる存在へと変えることに成功した。またトンド・エクティは 2019 年より毎年、国際シンポジウムを開催して王宮文化の研究を蓄積し Web サイトで公開するとともに、博物館部門と協力して各年のテーマを同時期に開かれる王宮博物館での特別展示と一致させることで、一般にも分かりやすく伝えている。このように現地では王宮が文化機関として、住人の文化活動への参加権を保障する枠組みを着実に整えつつある。

4.2 住人主体の無形文化活動の実践例

次に住人主体の新たな無形文化活動の例として、資産の一つである歴史建築のカマンドゥガン(Kamandungan Kidul)の活用をみていく。カマンドゥガン建築は王宮南部に位置し、ジャワ哲学では人間の旅路における母親の子宮を象徴する重要な建築物であるが、長く放置され周辺には不法住民もいた。ここは修復と整備の後、女性の活躍と王宮兵団の伝統復帰と強化という2つの中心地として機能し始めている。

女性の活躍

まず 2022 年頃に王宮は新しくジャワ伝統音楽ガムランの女性だけの演奏グループを結成し、カマンドゥガン建築で定期稽古(35 日に1度、儀礼前は週に2度)を開始した。ガムラン音楽は王宮の儀礼・芸能

に欠かせないが、それまで慣例として男性のみで担ってきたためこの試みは王宮史上初となる。王宮は重要儀礼として年に 3 回のガルブック (Garbeg) と呼ばれるイスラム教に関する儀礼を行い、農作物で作られた大きな縁起物 (gunungan) を 3 か所の主要な歴史建築で配分する。このうちマングブメン邸 (ndalem Mangkubumen) での配布は長く中断されていたが、邸の修復・整備を終えた 2024 年から縁起物の配布儀礼を再開した。女性ガムラングループはこの時から、主要任務としてマングブメン邸での縁起物の配布儀礼時の演奏を担うようになった。加えて縁起物の受け取りも従来は男性王族が務めていたところを、王の長女を中心とした女性王族のみで担当するよう変更した。本儀礼での農作物を中心とした縁起物の配布は、スルタンが人々に豊かさを与えるというジャワ哲学の中心的考えを象徴している。よってカマンドゥガン建築での定期稽古とマングブメン邸での配布儀礼は、単に女性に文化活動への参加の場を提供しただけではなく、重要で表立った場所で女性が重要儀礼を担い始めたという点でも、女性たちの自尊心や社会的な連帯感を養っていると思われる (ただし非公開の王宮深奥部では従来から女性も重要儀礼を担っている)。

王宮兵団の伝統復帰と強化

カマンドゥガン建築は王宮兵団 (bergada prajurit) の活動拠点としても再生し、軍事儀礼文化の伝統復元と強化が図られている。もともと兵団ではあるが現在は前述のガルブック儀礼での縁起物の護衛、賓客の出迎えなど儀礼的役割のほか、王宮警備 (20 日ごとの当直) を担当し軍事的要素は担っていない。まず王宮は 2022 年ごろから兵士の拡充をはかり、2025 年の 60 人から成る女性兵団の復活も含め、長く途絶えていたいくつかの兵団の復活や、縁起物の護衛における兵団の配置を従来の伝統に戻すなど兵団の整備と増強を行った。さらにガルブック儀礼の兵団行列の出発点は長年王宮の北広場であったが、2024 年には本来の伝統に従ってカマンドゥガン建築へ戻した。以上に並行して兵団の訓練も充実させた。それまで兵団は訓練というよりガルブック儀礼前に、4 回ほど行進などの予行演習を行っていたに過ぎなかったが、現在は武士精神を育てるため、試験的に週に一度のジャワ弓道や吹き矢をはじめとする五種の武術の定期稽古も行っている。また王宮は国防省が実施する非常時に国軍を補強するための 3 か月の予備役に 11 名を王宮代表として 2023 年ごろに派遣した。

このようにカマンドゥガン建築は現在、およそ 500 人を超える兵士たちの活動拠点とガルブック儀礼の重要な地点として機能し始めている。王宮兵団は大所帯ではあるが兵士たちが任務や訓練で頻繁に顔を合わせ、王宮文化の再生を担い、王宮の代表者として国軍の訓練に参加することは、彼らのアイデンティティと連帯感、自尊心を育てていると思われる。

5. まとめ

本稿は文化遺産保護の国際的な潮流が、コミュニティを主体とする有形・無形文化の包括的保護へと移行し、それにより人々の Well-being 実現を目指していることを明らかにした。このアプローチは無形文化遺産条約が持つ、文化の動的状態の維持を目的とし、担い手コミュニティの自主性を尊重する理念に共通する。この潮流を具体的に示す事例として、2023 年に世界遺産となったインドネシアの「宇宙軸」を分析した。この遺産はジャワ哲学という深遠な無形文化が、物理的な都市空間 (宇宙軸) の真正性と OUV を裏付けている点で、有形・無形の二つの文化遺産条約の理念を統合する独自性を持つ。本稿ではこの「宇宙軸」上のカマンドゥガン建築を拠点とした女性ガムラングループや、王宮兵団の活動強化といった、コミュニティ主体の無形文化実践の再生と拡充が行われている状況を取り上げた。これらの取り組みは、物理的な資産 (有形) の保護と景観の整備 (不法居住民・高層ホテルの問題解決) と並行して、デジタル技術を活用しながら住民の文化活動への参加権を保障するシステムを整えつつ、住人のアイデンティテ

ィや連帯感を高めることに貢献しており、国際機関が目指す文化的 Well being の創造を顕著に体现する事例として位置付けることができる。

【文献・資料】

UNESCO

2022 Final Declaration, MONDIACULT 2022

2023 The spirit of Naples

2025 Draft guidance note on safeguarding intangible cultural heritage in urban contexts

2025 Outcome Document MONDIACULT 2025

UN

2024 The Pact for the Future

(いずれも UNESCO と UN の公式 Web サイトより入手)

岡部政美

2025 『ジャワ王宮舞踊—無形文化遺産の伝承』 風響社

(2026) 「新 SDGs における文化の再定位—有形・無形文化遺産保護と持続可能なまちづくりの国際動向」『人文学学際研究』第1号、査読済み掲載予定

ⁱ The Cosmological Axis of Yogyakarta and its Historic Landmarks

ⁱⁱ 本稿執筆時点（2025 年 10 月 23 日）ではドラフト文章での発表